

## 腐葉土

校長 榮 秀之



落ち葉でつくったよ。(1年生)

桜の葉が色づきはじめ、はらはらと落ちてくるようになりました。1年生の生活科で、自然と触れ合いながら季節を感じ、感じたことを表現したり見つけたものを使って遊びを創り出したりする学習があります。

子どもたちは、拾った落ち葉の形や色、大きさなどの特徴を生かして、思うままに“落ち葉の芸術”を創り出していきます。ドングリを拾えば、転がしたり回したりして遊び始め、次々と工夫を加えたり友達とかかわったりしながら楽しさを追究していきます。

さて、子どもたちに拾われなかった落ち葉の行方を追ってみます。学校の落ち葉は、集めて校舎の裏に設置してある温床枠に入れられます。枠の中では、虫や微生物が落ち葉を分解・発酵させて腐葉土が作られていきます。発酵を促進するために米ぬかも入れています。春にはふかふかの腐葉土ができていますので、土と肥料を混ぜて「一人一鉢」用の土づくりに活用しています。

昨年春、温床枠の中に入って腐葉土を外に出しているとき、腐葉土の中に“思わぬ住人”を見つけてびっくりしたことを覚えています。それは、10cmほどに成長したカブトムシの幼虫でした。掘れば掘るほど幼虫が出てきたので、おそらく数十匹はいただろうと推測されます。カブトムシと言えば、クヌギ林で生まれ育っている印象をもっていました。こんな身近なところに卵を産み付けていたことに驚いてしまいました。毎年夏になると、登校中に捕まえたカブトムシを手にもってくる子どもが何人もいるのは、「自然が豊かな地域だから」と漠然とした見方をしていましたが、実は「腐葉土」の存在が関係しているのではないかと思うようになりました。

学校の温床枠には、深さ1m程の落ち葉が入っています。表面は葉の形が残っていますが、下に行くほど葉っぱが粉々になり柔らかくなっていきます。半分くらいから下の方はほとんど土となっていて、ふかふかで森の香りがします。幼虫は、このふかふかの中にいます。

先日、地域の方から腐葉土を作る温床枠から毎年たくさんのカブトムシが羽化することを聞いて、3年生のクラスがカブトムシの幼虫をいただきに行きました。この地域で、カブトムシがどのように卵を産み、どのように幼虫時代を過ごし成長していくのか体験的にカブトムシの生態を解き明かそうとしているのです。